がん哲学外来市民学会　第４回大会

実行委員長あいさつ

がん哲学外来市民学会　第４回大会

実行委員長　**西　村　元　一**

（金沢赤十字病院　副院長）

第４回がん哲学外来市民学会に関わって

５年ほど前に樋野先生と出会い、その後少しずつがん哲学外来やメディカルカフェというものに興味を持ちはじめました。そして３年前に佐久で開催されました第１回大会ならびにその前日のがん哲学外来コーディネーター養成講座に参加して以来、がん患者サポートとしての一つの形としての有用性を実感し、積極的に関わらせていただくようになりました。

ヒトはみんな画一的ではなく、一人ひとり異なります。当然、がん患者もしくはその家族も然りです。がんと告知されたときにどのようなサポートを必要とするかは当事者にしかわかりません。しかしながら当事者は大概の場合、自分たちにどのようなサポートが必要なのかを理解しがたい状況であり、病状は時間とともに変化していきます。さらに場合によってはどのようにサポートを受ければよいかわからない可能性は十分にあり得ます。

近年、がん治療においても単に医療レベルの進歩のみならずチーム医療推進など以前とは比較にならないような良好な環境になってきました。しかしながら奇しくも今回、自分自身が患者の立場になってみると、単に周囲からの業務的に携わるサポートだけではなく、非常に難しいとは思いますが“自分たちの現状を理解して、ずっと寄り添ってくれる人”もしくは“ずっといられる場所”が必須であることを実感しています。その“人”がどのような人で、その“場所”がどのような場所なのかは漠然としていますが、少なくともおそらくそのことは医療者だけが考えても解決できるわけではなく、みんなが他人事ではなく自分のこととして考えていくことにより、少しずつ見えてくる可能性があると思います。そしてその一つのあり方を導き出すのががん哲学外来市民学会だと思います。

今回、第４回大会に実行委員長として関わるに当たり、岩田大会長と相談し、まずは自分たちの思いを伝えるだけではなく、相手の言葉に耳を傾けるということが何事にも基本だということで“傾聴”をテーマとさせていただきました。１日という短い時間ですが、参加されたみなさんと一緒に様々なことを傾聴し、そして次のステップへとつなげていくことが出来ましたら幸いです。